

一九四九年頃の物語。

物語に出て来る、『通帳』とは「米穀通帳」の事でこの通帳がないとお米が買えなかった。つまり、身分証明書のようなものです。

### 39 交番の宿直室

狭く暑苦しい部屋。

村上刑事と女が居る。

村上、ブローニング型の拳銃を調べながら。

村上「……お前が取り扱ってるピストルはこの型ばかりか？」

女「(フテ腐った様子で)ピストルなら、何だって商売になるんだよ」

村上「最近コルトを取り扱った事はないか？」

女「コルトって何だい？」

村上「この位の大きさで……」

と、手帖にコルトの型を描いて見せる。

村上「……こんな形の奴だ」

女「ああ、それなら知ってるよ……昨日貸したやつだ」

村上、思わず大声を出して、

「おい、それ、いつ、何処で返すことになってるんだ？」

女「今夜、あそこでさ……あんたと取引した後で受け取る筈だったんだ」

村上「……?!」

女「入り口ですれ違ったよ……あんたに引っ立てられて出てきた時にさ……」

村上、慌てて飛び出す。

女、その背に、

「びっくりりして見てたよ！」

村上、すぐに戻って来る。

村上「おい……すると、お前、その男の通帳持ってる筈だな……出せ」

女「(ニヤニヤして)あんたはトウシロウだね……ピストル返しに来る時にや、分け前を貰うんだよ……そこで、うんと

たたいて少しでも多く吐き出させるのが、この商売のボロ  
イところさ……何しろ、強盗たたくをたたくんだからね……一筋  
縄じゃゆかないよ……あたいなんかの出る幕じやないの  
さ」

村上「すると……」

女「あそこで、あんたと背中合わせで新聞読んでた男がいた  
ろ……あれがお目付け役さ……そいつが通帳握っているん  
だい」

村上、立ち上がる。

女「あわてたって駄目だよ……もうみんな風を喰くらって逃げ  
てるさよ」

村上「……」

女「何をぼんやりしてるのさ……さっさとどっかへブチ込ん  
どくれよ……何て暑いんだろう、ここはまったく蒸し焼き  
さ！」

と、胸にへばりついたブラウスを気味悪そうに引き  
離しながら立ち上がる。

女「ふん……どうせ大した事アないんだ」